
know it which is called "LOVE"

秋永 ニカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I don't know it which is called "LOVE"

【Nコード】

N8656R

【作者名】

秋永 二カ

【あらすじ】

失せ物探しの散咲恭介が己の過去のミステリと向き合う話（予定）

With Neko 1

「ねえ、先輩。こうしてレタスを食べるのと人の肉を食べるのって何が違うんだと思います？」

などといきなりとなりでBLTサンドを食いながらネコが俺に質問してくるので俺は面食らう。ちなみに俺はラーメンを食っている。どうでもいいね。

「そりゃ、お前。味じゃないのか？レタスに限らないだろうけど人が普通に食べてるものは何らかの美味しさがあって食べられてるんだろうよ。美味いから魚とか牛は食べるけど不味いからミミズなんて食わないだろ。それと同じことじゃないのか？生憎俺は人肉は食った事無いからその味について分かんないけど」

「でもカニバリズムとかありますよね。人食い種族。彼らは実に美味そうに食べてたりしないんですか、人の肉を？本当は美味しかったりして」

「だから知らないって」

だけどネコの言う事も一理あるかな、と俺は思う。実際食べた事の無いものに対して美味い不味いの評価を下せるはずが無いのだ。だったら俺が人肉を食わないのは何の理由があるのだろう。それはひょっとしたら倫理観とかその類かも知れない。

そんな俺の胸中を見透かした様にネコは言う。

「道德、社会のルールでは、少なくとも日本ではそれって禁止

されてますよね。あれ、法律に人肉食禁止なんてあったかな？ まあいいや。でも一般的な日本人の感覚からすると食べませんし食べたら周りの人間から白い目で見られるの必至でしょう。孤立ですね、フリーク扱いですね。じゃあ私たちが人の肉を食べないのってそういうものに縛られてるからなんですかね？」

さっきからネコの口調は殆ど疑問系だ。それは俺に答えを教えて欲しいと言うよりまるで俺に答えに気づけとでも言わんばかりの。そしてまた疑問系で返されたからにはきつと答えは味云々倫理観云々じゃないのだ。少なくともネコの求めているものとは違うらしい。

「じゃあ痛みとの共有とか？ 首を斬られる人間見ると自分の首が痛くなるみたいに。人の胸肉とか食つてると自分の胸が痛んだり」

肉体的に痛むのと、感情的に胸が痛むのを掛けた我ながら上手い答えである。戯言だが。

「感情の共有ですか。まあそれに近いものもあるとは思いますがどね。ていうか結構いい線いってますよ。問題はその共有がどうして起こるか。……もうほとんど答えですね。私って優しい」

どうして感情の共有が起こるか。それはつまり《どうしてレタスに対して起こらずに人間に対してのみ起こるのか》という事だろう。そしてその答えこそネコも求めている答え。イツジアンサー。そしてその答えが俺にも分かる。ヒントのおかげだ。ネコは本当に優しい。

「それは……」

「それは？」

「愛だな」

目が覚めた。

目の前には湯気を上げるラーメンの容器。すこし離れたところでネコがBLTサンドを美味しそうに頬張っている。どうやら食事中ウトウトして変な夢を見ていたようだ。

「なあ、ネコ」

「はひ？」

ものを食べながらだから若干発音が可笑しいネコに対して質問する。

「レタス食べんのと人肉食べんの何が違うんだろうな」

「は？何言ってるんですか食事中に。カニバリズム趣味でも持つてたんですか先輩は。それともそのラーメンに異物でも混入してましたか？ だったら訴えたほうが良いですよ。返金の上にもう一杯とかあるかもしれませんし」

「……いや、なんでもない。変な事聞いて悪かった」

あの問答が本当に夢だった事を俺は再確認する。そもそもネコはそんな可笑しなことを訊いてくる奴じゃなかったはずだ。

じゃあ何故夢の中とはいえあんな質問をしてきたのだろう。あれは俺の内なる感情というか欲求の表れだったのだろうか。カニバリズムに対しての？ふん、馬鹿馬鹿しい。第一ネコの言ったように食事中に考える話題じゃないな。これから食うラーメンが不味くなるだけだ。

しかしラーメンを啜りながら俺はさっきの夢について考えている。愛。

そういえばネコが俺に言いたかったのはカニバリズム云々じゃないか。くてそのことだったんじゃないか。

そして俺はもう一度質問する。
違う質問を。

「なあなんで人って他人の痛みに共感できると思う？」

ネコは、BLTサンドを食いながらこっちを見て、

「愛じゃないですか？」

そう言った。

With Neko 1 (後書き)

評価、感想、アドバイスなどとして下さる方大歓迎です。
どうぞよろしくお願いします。

O u t s i d e a d r e a m 1 (前書き)

説明だけです。すいません。

Outside a dream 1

ネコこと露音紙縵つゆねこより（家出少女）と俺が出会ったのは俺が今の職業を始めてしばらくも経たないうちだった。

金持ちの道楽、または暇つぶしといわれても仕方ないような職業「失せ物探し」を俺が本気で一人暮らしの食い扶持にし始めたのは決して金持ちだったわけなく、親からのまあごく一般的な仕送りに足せば充分な生活費を稼げると判断したからだった。

俺の高校時代の友人に五十嵐恭夜いがらしきょうやという男がいる。そいつの一族は酔狂なことに探偵職を家業にしている、しかもそれは素行調査なんてシヨボいものじゃなくて警察とも代々関わっているという犯罪調査のまさにミステリ小説で云う「探偵役」みたいなものに相当していた。そんな家柄ゆえ五十嵐は家業の探偵業とか迷子探しとか失せ物探し、そんな類の職業に詳しかった訳だ。その五十嵐曰く、

「世間が思ってるほどさ、素行調査とかって儲かんじゃないわけじゃないんだよ。多分。犯罪捜査ばっかしてる家の連中とは違うけどさ、ある程度のスキルがあれば何とかなるっつーか」

実際アイツはその例の知り合いがいるらしい。そしてあいつの言うところの「スキル」を俺は持っていたのだ。一般人とか少々違性感性、とでも言うべきだろうか。まああまり詳しい事は言わないがそもそも俺自身詳しく原理を知らない。そういうのにむいた類の能力と言っても差し支えない才能を俺は保持していたのだった。

で「若いしまだ取り返しがつくから」という理由で両親を納得させて俺は家を出、そして実際に失せ物探しなどという酔狂な職業を始めたのだった。大学に行つてはいなかったので時間なら腐るほどあつたし、五十嵐が友人のよしみで業界の方にコネを作ってくれたおかげで仕事は捗り、自分でも驚くほどに生活費には困らなかった。始める前はバイトも平行することも検討していたのだがその必要はなくまさに予想外と言つべき結果だった。

「だろ。世の中の大抵の事つてやつてみりや何とかなる事ばつかなんだよ」

と五十嵐に言われたのは数ヶ月前。すでに仕事を始めて一年近く経つた頃だった。まさにその通り。ザツツライト。

そんな失せ物探し屋「散咲事務所」の主人散咲恭介と家出女子高生露音紙縵を直接的に結びつけたのはネコの父親で、間接的には五十嵐だった。

それはどういう事かというつまり、ネコの父親の依頼を五十嵐が俺に回してきたという事。こういう風に俺が五十嵐から依頼を回してもらうことは決して珍しい事ではなく、むしろ業界のその筋から（時には仲介料を払って）受けた仕事が俺の大部分を占めてるといっても過言ではない。

その依頼自体でも、必要に応じて情報を要する場合はその情報を買うことも多い。その情報を元に俺の手で依頼を進める（偶に俺の

手では解決できないものありそうだったものは仲介人を通して他人に回される事になるのだが）。

そして俺はその件の依頼でネコと出会い、一言では説明できない紆余曲折を経て何故か俺の事務所（兼自宅）に住まわす事になったのだ。

だから俺は別にネコの先輩でもなんでもない。ただ年上というだけだ。そもそもあいつは女子高生ながら今は学校に行ってなかったはずだ。家出少女にして不登校少女なのだ。けしからん奴め。

Outside a dream 2 Client

時は夕暮れ時、事務所の窓から入る夕日の色が部屋を橙色に染めていた。

「先輩ー。お腹減ったんですけどー。やばいです。ぐきゅるるーを通り越してどっかーん！　って感じでお腹なってるんですけどー」

壮絶な効果音とは対照的にネコはテーブルに突っ伏してぐったりしている。それは本人の言葉を信じるならば空腹によるものなのだろうがついさつきBLTサンドを6つも頬張った人間の台詞としては不適切であると判断し俺は取り合わない。メールではないので返信を返す行為はひどく無意味であると判断し俺は黙々と作業を続ける。

それはつい昨日入ってきた仕事の依頼。珍しく俺のところに直に依頼人が来たのだ。

『居なくなつた黒猫を探してください』

簡素かつ単純。ただそれだけ。故に高報酬なんて望むべくもないはずなのに依頼主の女性はよほどその猫のことが気かりなのか依頼料は手付金だけで六桁も払ってくれた！

うん、怪しい。何か裏がある。それは確かだろう。それを匂わせなくても口止めとしての高報酬かもしれない。

だが思えば俺の所に来る依頼なんていつもこんなものでうんざり

するほど簡素ながら高報酬だったりそれは嫌な方向に読みが当たってちよつと面倒臭かったりするのが大抵なのだ。

ちよつとの金を払って物探しを依頼するくらいだったら自分で探したほうが良いだろう、どうせ依頼するなら高額で普通でないトコロに依頼しよう、そういう事かも知れない。

事実散咲事務所は『普通』の探し物屋ではないし（そもそも失せ物探しなんて看板掲げてる時点で普通の店ではないことが窺える）、探し物をするのなら巨大なネットワークを持ったところがいいのは確かだ。

そして俺は早速そのネットワークに調べ物を電話で依頼する事にする。携帯電話を取り電話帳で探すのは五十嵐の番号。

「……………もしもし、散咲だ。五十嵐か？」

「おう。人は俺を五十嵐探偵事務所4代目探偵、探偵名で『五夜』と呼ぶが、俺を五十嵐と呼ぶお前は散咲か」

「長いんだよ、何だ探偵名って。俺だ、散咲だ。ちよつと調べて欲しい事がある」

「仕事か、応じよう。代金はそちらの報酬の一割五分でどうだ」

一割五分。申し分ない。むしろ少なすぎるくらいだ。そもそも俺の仕事は五十嵐を主とするネットワークにとっても助けられている。もつと取られても文句を言えないのだ。その点では本当に五十嵐に感謝している。しかしそれは俺の首を握っていると言う事にもなるので俺の五十嵐だけには頭が上がらない（上げられない）のだ。

「どうした？ 一割五分じゃ不満か」

「まさか……！ 本当毎度感謝してるよ」

「まあお前にこの仕事推したの俺だしな。今更搾り取ってお前を潰すなんて義がないだろ」

やはりこいつは普通に良い奴なのだ。こいつを友人にもてたのは本当に幸運だろう。

「本当有り難うな。で、依頼なんだが……猫について少し調べて欲しい」

五十嵐が少し驚く声をする。

「ネコって……お前ネコちゃんに家出て行かれたりしか？ 最初あんな迷惑がってたのにやっぱ男女の同棲っていうのはそういうものかねえ」

「違えよ。ネコなら家にいる。あと生憎お前が想像してるような関係にはなっていない。露音紙縊じゃなくて黒猫だよ。依頼人が探して欲しいとの事。何せ依頼人が名前と写真しか渡さないから困ってた。まあ正確に言うとその猫を飼ってる依頼人の事を調べて欲しいんだがな」

俺はあの依頼人の女性を思い出す。生憎、年を女性に尋ねる趣味はないので聞きはしなかったが俺より四、五は上に見えたから二十代前半といったところだろう。喪服にも見える黒服と黒いスカートは愛猫とのお揃いかどうか知らないが、その色のせいで胸の真っ赤

なペンダントがやけに目立っていた。宝石だったらルビーといったところだろうか。

彼女は『御堂理穂』みどうりほ名乗り、連絡先と黒猫の名前が『シニカル』である事を告げて後は何処にでも居る普通の黒猫にしか見えない写真を渡したただだった。俺が『そんなんでこのただっ広い世界を探せるかつつの』と（対依頼人口調で）言ったら、『大丈夫です。この町にいるはずですから』とだけ言って帰ってしまったのだ。些か情報が少なすぎる。その事を五十嵐に言つと

「でもお前ならそんなに情報あれば探せるんじゃないか？　だからこそその失せ物探^{その仕事}しだろ」

と言い返された。それは買いかぶりすぎだよ五十嵐くん。俺の能力はそんなに便利じゃない……はずだ。

「でもすまないな、散咲。パスだ」

「は？」

「俺は実際お前の力を評価してるぜ。そのくらいの情報ならお前探せるだろ、つて。というかその依頼人、御堂だつて？　……生憎『そっち系』については探れないんだ。悪い」

「意味分かんねえよ。何だよそっち系つて？」

「あーホントごめん。それ無理なんだ。お前は知らないかもしれないけどヤバイんだよ本当。お前も何か感じなかったかのよ御堂理穂って奴見て。何か感じたんならその依頼、手え引くか自分の力だけでケリつけてくれ。本当すまん」

五十嵐の会話の雰囲気電話を切る方向に向かっている。訳が分からないが何とかして繋ぎ止めないとこの電話の意義が通話料を払っただけで終わってしまう。俺は焦って口調が荒くなる。

「何か感じたってなんだよ！ そんな抽象的な物言いじゃ何も分かんねえだろ。っていうか引けって、じゃあ回していいのかよこの依頼？」

「いいけどよ、多分誰も引き受けねえぞ知ってる奴は。あとちゃんと思い出しみな、そいつとあったときの事。何か感じたはずだから。じゃ、すまねえな」

フツツ。

通話が切れる。結果として通話料の消費だけで終わってしまった。

「先輩ー。電話終わったー？ 何か食べるもの ってどうしたんですか暗い顔して。相手五十嵐さんじゃないんですか？」

「ああ」

答えるがそれだけしか言えない。思考の割合をネコとの会話ではなく、五十嵐に言われた通り御堂理穂と会ったときの事を思い出すことに費やしてみる。

喪服にも見える黒服、黒いスカート。一般的とは言えないが決しておかしい服装ではないはずだ。表情は笑ってはおらず普通に見た限りでは無表情に分類されるものだった。しかし俺には何処か焦っ

ているようにも見えたがそれは果たしてどうなのだろう。無表情に見える、しかしどこか焦燥感の感じている顔。何故だろうか。それは『内なる焦りを悟られないために封じ込めている』という事？ 依頼で何をそんなに焦っているのか。焦っているのならばあんなにさっさと帰っていったのも頷けるが……。

そういえば……！ 確か一番最初に感じた違和感。入ってきて一番最初に目についた

「左手にぐるぐる包帯巻いた女の人の事でも思い出してるんですか」

ネコも憶えていた。そう、左手に不思議なほど巻かれた包帯。リスカットの痕にしては大きすぎるそれは只ならぬ雰囲気纏っている一番最初に目に留まったはずだった。その包帯はまるで壊れかけているような印象を与えるはずなのにこちらが近付く事を躊躇ってしまう鋭さをも持っている。しかしその包帯の存在感は、直後目に入った喪服のような黒服と胸の赤いペンダントのイメージですぐに打ち消されてしまっていたのだ。だから憶えてなかった。もしそれを意図してやっていたというのならそれはあの包帯を隠したかったという事だろうか？

「確かに危ない感じしましたよねーあの。御堂さんでしたっけ？ なんか思い当たる節でもあるんですか」

……いや、俺自身特に何がどうというわけではないのだ、五十嵐の反応以外。第一、こんな事で毎回依頼を蹴ってたら仕事にならない。それもまだ着手すらしてない依頼を放り投げるなんて。

俺は仕事を請ける事にする。御堂理穂のよく分からない左手の包

帯もそれが黒猫捜索に関わらない限りは気にはしないことを決める。

「いや別に。特に何かあってわけじゃない。綺麗な人だったなと思
い出してただけさ」

そう言ってネコに肩を竦めて見せる。

「浮気ですか！？ 目移りしたんですか！？ 先輩の最悪、私と
付き合っていないながら！ 所詮年下より年上の方が好みだったんです
ね先輩は。失望しました。先輩は絶対ロリコンだと思ったのに！」

「誰がロリコンだ。っーかお前と付き合ってたねーから」

まだネコがまだぎゃあぎゃあ喚くので俺は部屋を後にして寝室へ
行く。流石にネコも追ってこない。

ネコが騒ぐのを止めただけでも知れないが厚い扉を閉めるともう
声は聞こえなくなる。そして俺はベットに横になり、そのまま意識
は布団の底へ、沈んでいく。

俺は眠る直前に御堂理穂の事を考えていた。しかし俺の場合寝る
前の思考の内容は夢の内容に全く関わってこないのだ。

With Aona 1

アムインマイドリーム。オーケイオーケイ。今俺はそれをはっきり理解している。

俺は今夢の中にいる。それがはっきり分かるってことはこれが夢であるという事の証明だ。

何を言ってるか分からないかも知れないがそれはつまり、現実ならそれを夢と誤認する事はないし、夢の中なら現実だと思い込むパターンとこれが夢だと気付く二パターンがある。

つまりこれが現実だと思っているのならそれは夢か現実のどちらか判断する事はできないが夢であるという自覚があるということつまりこれは夢なのだ。証明終了。

しかし今自分が夢の中にいると分かったからって出来る事は何もありやしない。頬をつねった所で痛みを感じたと錯覚するのが関の山だろうし、だからよくある物語の主人公はこういう状況に陥った場合夢の進行を在るがままに享受する他ないのだ。俺もそれに従う事にする。というか従わざるを得ないわけだ。

さて、俺は周りを見渡す。今の所は誰も居ないし何もない。尤もこの場合の何もないというのは現実での『何もない』とは異なるのだが。現実では周りには何もなかるうが在るべくして在るべき物『空気』やら『匂い』なんてのは存在するわけだが夢の中はそれすらない。

本当に何も無いのだ。

真っ白、という色彩概念すら大きく異なる。本当に何も無いという虚無を言葉で、ましてや色などで表現できるはずがないのだ。だから本当に何も無い。それだけだ。

しかしこうして見ると自分の姿は見えるから完璧な虚無ではないかもしれない、とも思う。夢の中の俺の服装は至って普通世間的に見ても普段の俺的に見てもだ。寝る前にどのような格好をしていたかは憶えてないがひょっとしたらそれとは違っているかもしれない。黒のＴシャツ、並みのジーンズ。差し障りの無さで言ったら世界チャンピオン級だな。

などと馬鹿なことを考えて自分の服装に気を取られてたらいつの間にか目の前に一人の少女が居た。

誰だ？

俺は目を凝らす。しかし分からない。見えないわけではないのだ。その姿ははっきりと見えるのに誰だか分からない。俺は若干苛立つ。

そいつは色々な特徴を持っていながらもそれが定まらずまるで刻々と姿が変わり続けている様に見える。だから俺はそいつが誰だか断定する事が出来ない。

ありとあらゆる少女を内包していながら果たしてそのどの少女でも有り得ないような存在。

そいつは知らない奴じゃない気がする。それどころか……よく見

ると知ってる奴によく似ている気もしてくる。知っている奴の中からこの少女に一番近い人物は。

ネコか？

俺がそう思うと途端、その誰とも分からなかった少女がネコになる。いやひょっとしたら元からネコだったのに俺の思考にちよっと霽がかかっていてすぐに判別出来なかっただけか？

「ひゃっほー先輩。ういっ！ 夕方からおやすみなんて些か早すぎじゃありません？ 私達の夜はまだまだこれからですよー」

いつものネコだ。他の誰でもなくそいつはネコだと俺は確信する。やはりさっきのは俺の思考の混濁か。

「混濁じゃありませんよ。先輩の考えは正しかった。ただ先輩は己の思考が現象と相反した時に思考の方を疑ってしまい現象を疑えないだけなんです。先輩に足りてないのは思考でも現象でもない第三者の意見という三つ目の比較対象なんです。だから私は先輩の傍でいっつもアドバイスしてあげますよ」

こいつの言っている事がなんとなく分かる気がする。確かに俺は自分の思考より現実に起きた出来事を優先させてしまいがちだ。凶星なのに腹が立たないのは偏にネコの憎めない明るさゆえか。

しかしネコは普通に可愛い方なので笑うと当然可愛い。別に俺は年下好きではないが。断じて。しかし三つ四つ下なんて世間的にはロリコンなんて呼ばないだろう。いや別にネコをどうこうしたいという訳じゃないが。断じて。

「もーひどいですね。先輩、自分に素直になりましょーよ。まあいいですけど。さて、そんな先輩に私から早速アドバイスです。実は先輩が今会いたいのは私じゃないでしょ？」

……どういう意味だ？ 俺は別に会いたい奴なんていないが。

「素直に素直に。さっきの先輩の言葉通り、私はありとあらゆる少女を内包していながら果たしてその少女でも有り得ないような存在です。だからネコではありますがまたそれと同時に先輩の知ってる別の女の子なんですよ。そしてそれは先輩の会いたい子の形を取っていなければいけないはずなんです。それなのに先輩が素直じゃないからこうして私が出てきて諭さねばならないんです」

俺の知ってる、今会いたい女の子？ 誰だそれは。

「夢っていうのはですね、会えないと思ってた人に会える場所なんですよ」

会えないと思ってた人？

「例えば……蒼菜ちゃんとか」

その瞬間ネコの姿が一瞬ばやけて変わる。蒼菜の姿に。

「蒼菜っ……どうして……?!」

「もー。折角妹がお兄ちゃんに会いに来たのにどうしてはないでしょーに」

いつの間にかネコの姿はもっと小さい別の少女になっていた！

そいつは俺の妹、散咲蒼菜。その姿は俺の記憶の中の蒼菜とまったく同じだ。姿だけじゃない。声も同じ、まだ分らないがきつと性格もそうかも知れない。

俺はひどく驚いている。目の前の変化にだけではない。こうして夢の中とはいえ蒼菜に会えていること、それ自体に驚愕したのだ。

「久しぶりだねー。へへっ」

「へへっってお前……」

俺はもう蒼菜に会う事は無いと思っていた。いや思っていたなんてものじゃない、確信だ。会えないと分かっていた。だからこそ俺は家を出たのだ。蒼菜の事に対するけじめとして。

だというのに目の前で微笑む蒼菜の姿は本当に何も変わっていない。

「久しぶりに会えて嬉しい？ どう？」

「そりゃあ兄貴としては勿論嬉しいさ。久しぶりの妹との再会なんだから。でも若干複雑だよ」

「ん？ どうして？」

「どうしてって、そりゃあ……」

もう会えないと思っていたから。

「ひょっとしてお兄ちゃん私のこと嫌いなのか？」

「まさか……！」

「じゃあ愛してる？」

蒼菜の目つきが変わる。表情も厳しくなる。

「なんだよ、いきなり愛してるって？ 兄妹でそりゃねえだろ」

「じゃあ愛してないのか？ ふーん……そうか愛されてなかったのか私」

「は？」

蒼菜の思考、というか発言が飛躍し始めている。マズイ。俺は思いついて焦る。そういえば蒼菜がこんな感じになると段々ヒステリックになり、最後には手が付けられなくなるのだ。

「愛してないんだ。そーかー、だからお兄ちゃんお家出てっちゃったんだね。それで変な事務所開いて女の子といちゃいちゃして」

そんな事を言われるのは五十嵐に続き本日（？）二回目。勿論反論する。

「ネコとはそんな関係じゃないって」

「嘘だね。お兄ちゃんネコさんへの接し方には愛が感じられる

よ、それそのもだよ。私にはもう用は無いつて愛を与える相手をすり替えたんだ」

何だよ愛、愛って。最近俺の夢の中の連中では俺に愛を語るのが流行っているのか？

「愛が無いから私はもう要らなくなった。それで新しく愛を与える人を探したんだ。求めたんだ。見つけたんだ、ネコさんを」

前回の夢のネコと同様、やはり蒼菜も愛について言いたい事があるらしい。

「愛ってそんな簡単に挿げかえられる物じゃないだろ」

「ううん。愛はね、重いのにとても軽いんだよ。与えられてる時はそれがとても重く、しっかりとした質量を感じてそれを与えられてる事に幸せを感じたりする。けど実は愛なんて簡単に相手を挿げ変えられちゃうほど軽いものなんだ。気付いた時にはもう遅い、今更それを引き止める事なんてできない。そしてとても後悔するんだ、私みたいに」

こんな状態の蒼菜に反論するのはあまり宜しい事ではないだろう。しかしどうしても聞き捨てならない。それじゃあまるで俺が蒼菜の事なんか忘れてるみたいじゃないか。

「その言い方はおかしいだろ。なんで！俺がお前をもう何と思っ
てないみたいな言い方するんだよ」

「だってお兄ちゃん……『あの時』私の痛みに共感してくれなかったでしょ」

「あの時って……お前、」

蒼菜が攻めるような目つきに変わる。俺の背筋に冷たい不快感が走る。それは掘り出されたくない記憶^{もの}を誰かに掘り返されてしまった時のような感情。思わずそれに疎んじまう。

「ネコさん言ってたでしょ他人の痛みに共感できるのは愛ゆえだって。なのに私が
れたあの時、お兄ちゃんは私の痛みを感じてくれなかった」

俺は息を呑む。

蒼菜が息を吐く。

「……お兄ちゃんにとっては他人事でしかなかったんだ。だってあの時もう既に、」

お兄ちゃんは

私を

愛していなかった

んだから。

.....!

虚無の映像に

虚無と同じく言葉では形容できない表情を浮かべた

蒼菜の顔が

浮かんだ。

俺はそれが夢だったことを思い出した。

With Aona 1 (後書き)

ヤンデレ風の人物書くのって難しいですね。ただでさえ駄文が更に酷い事に(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8656r/>

I don't know it which is called "LOVE";

2011年10月8日20時51分発行